対立的な心構えが確証バイアスに与える効果

吉光　彬

【目的】本研究の目的は、Kleiman & Hassin (2013)によって示された対立的な心構えが、ルール発見課題における確証バイアスにも効果を与えるのかどうかを検証することであった。対立的な心構えとは、非意識的な目標対立によって引き起こされる情報処理の構えであり、対立的な観点から問題へアプローチする頻度を増加させる。確証バイアスとは、自分が考えている仮説に合致する事例や情報を選択的に収集したり、重視したりする傾向のことである。確証バイアスは Wason (1960)の 2-4-6 課題等の仮説検証課題を用いて、これまで様々な研究が行われてきた。本実験では、対立目標プライミングによって対立的な心構えを生じさせた実験参加者にWason (1960)の 2-4-6 課題を行い、仮説検証傾向・仮説検証過程を分析し確証バイアスの効果を調べた。

【方法】実験は、プライミング操作によって対立的な心構えを引き起こす目標対立条件と、統制群に分かれて行われた。まず語彙判断課題によるプライミング操作によって、目標対立群にのみ対立的な心構えを生じさせた。次に、別の実験であると教示して 2-4-6 課題を行った。2-4-6 課題は Wason(1960)と同じく、最初に提示する数字の組は「2，4，6」、正解のルールは「増加する数列」で行った。2-4-6 課題が終わった後は、対立目標プライムによって意識上に変化が現れていないか調べるための意識調査を行った。その後、Kleiman & Hassin (2013)で対立的な心構えの効果が確認されたアンカリング課題(Jacowitz and Kahneman, 1995)を行い、プライミング操作の確認のための単語完成課題を行った。

【分析】分析の結果、2-4-6 課題において目標対立群の正解者数(11 名)が統制群(4 名)よりも多かった。目標対立群と統制群の検証過程にも差があり、目標対立群に部分的な確証バイアスの減少が見られた。意識調査では、どの程度対立的な選択肢について考えたかを尋ねた質問と、自身の課題の成績に対する満足度を尋ねた質問で目標対立群の方が高かったが、それ以外の質問に差はなかった。アンカリング課題では、両群にアンカリング効果が見られ、また両群のアンカリング効果の大きさには差が認められなかった。単語完成課題では、語彙判断課題で提示した単語の正答率が高く、直接プライミング効果が確認された。

【考察】実験結果を受け、対立的な心構えはルール発見課題である 2-4-6 課題の確証バイアスにも効果があると考えられる。アンカリング効果には対立的な心構えの効果が見られなかったのは、プライミングとアンカリング課題の間に 2-4-6 課題と意識調査を行ったためであると考えられた。対立的な心構えが確証思考に関係のある他のバイアス、問題解決にどれだけ有効であるかは今後研究されるべきである。また、課題中の意識をいかに調べるかについても検討すべき課題である。対立的な心構えはまだ研究が少ないので、本研究は今後の研究に重要な示唆を与えるだろう。(基礎心理学)